
あの仔の隣

池 美花咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの仔の隣

【Nコード】

N1138B

【作者名】

池 美花咲

【あらすじ】

クラスですごく静かで、男子が苦手な女の子【中2】湊奈菜の物語。あんなに恐がっていた男子なのに、ある人に恋をしてしまう…

初恋の一時

ガタガタ…

三ヶ月に一度の、席替えの時間。

実はすごく楽しみな私【中2】。湊 みなとな 奈菜の物語。

「大野茜先生…は～い!! 皆の大好きなテスト返すわよ♪」

「男子＞中野＜…え～!? 昨日席替えやるって言ったじゃん!!」

「男子＞高安＜…そうだよ」

「女子＞美香＜…あたい、こいつの隣もう飽きたし」

「先生…あかんわ～先生、遠藤先生とあとでデートやもん!!」

予定あかせとかなあかんやろ～?」

「マジメな男子＞坂野＜…席替えなら、5分程度ですみます。」

「可愛い男子＞大谷＜…せんせ～おねがぁ～い」

「先生…えっあっ…う～ん…しょうがないわね」

「クラスの皆…い、やったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

「奈菜…ほっ」

チラッ

奈菜は、クラスを見渡してみた。

カップルでいっぱい。

ちょっぴり、居心地が悪い…

もちろん…と言っては奈菜には悪いが彼氏などいない。

っていうか、いたこともない。

それすら、男子ともろくに話せなく、クラスでも少し…

どころではなく、かなり静かな女の子である。

ザワザワ：
ガタガタ：

「奈菜.. あっこれから三ヶ月よろしくお願いしますっ」
「イケメン男子>一也<.. おう（^^）」

「奈菜.. なんか、一也君なら男子だけど恐くないな..」
奈菜が思わずボソツとつぶやいた。

普段は、自分から男子に話し掛けることなんかできないのに..
今回は違った。

隣でサッカーの本に無我夢中になっている一也を見ると、
なんだかどうしても話がしたくなった。

この、変なモヤモヤとしたキモチはなんだろう..
今までで、経験したことのない、この新鮮なキモチ..

キンコンカンコン..
キンコンカンコン..

予鈴が鳴り響いた所で、友達に囲まれてた一也が奈菜の隣に戻って来た。

「奈菜.. あ、あの..」

「一也.. なあ、教科書忘れちゃったんだけどさあ..」

「奈菜.. わっ私が見せるね!!」

「一也.. おう、サンキュッ♪」

一也がとびっきりの笑顔を私にしてくれた。

私も.. 生まれてきてからしたこともないような
笑顔を作って見せた。

「一也.. おまえさ..」

なにを言われるのか不安が頭をよぎった。

「一也.. 笑ってた方がイイよ（^^）」

この瞬間.. 初めて気づいた..

私…一也君が好きなんだ…

心の閉じていた扉が、【一也の笑顔】という鍵で開いたのだ。
新鮮なひまわりの香り…

奈菜の髪を風がなびかせた…
新しい風がふいた…

初恋の一時（後書き）

初めて書いてみたンで…

ご感想をぜひ、お待ちしております!!

この胸の高鳴りは…（前書き）

ドキドキ…

私は今生まれて初めて恋をしている…

恋ってこんなに胸が苦しいものなんだ…

絶対に叶わぬ恋だと思ってた…

だけど、あなたが優しくしてくれて…

少し期待してもいいですか？

この胸の高鳴りは…

チチチ…

小鳥が鳴いている。

今日の天気は、気持ちよいほど透き通った雲が、綺麗な空に満開。こういう、気持ちのいい日は公園などを散歩してみたくなる。でも、そんなことはしてられない。今日は学校…。

いつもは、居心地が悪かった。でも今は違う。だって隣には…ゴニヨゴニヨ…

ちょっとニヤけながら、道を酔っ払いのオヤジみたいにフラフラ歩いていた奈菜に、

ボンッ！！と威勢の良い音をたて、何かが体当たりしてきた。

「奈菜…きゃっ?!」

「女子＞未魅＜…おはよ!! 奈菜っ♪」

「奈菜…あっ未魅ちゃん、おはよう。」

「未魅…なんか今変だったよ? ? ? なんかいいことでもあったの? ? ?」

彼女は、一番仲の良い神崎未魅^{かんざき みみ}だ。

クラスで静かな私に、初めて声をかけてくれた友達である。

カップルだらけで居心地の悪い私が、登校拒否などにならなかったのは

彼女のおかげだとも言えるだろう。

「奈菜…いいこと? ? ? とくには…」
サッと目をそらした。

「未魅…あーッ!!ちよつと何隠してるのよ!!?」

「奈菜…きゃああー!!」

「未魅…ほれほれ」

未魅必殺のコチヨコチヨだ。

奈菜は、大の苦手だ。防御しきれない。

バス停の近くで、奈菜はダウンした。〔H100↓5〕

「未魅…あはっ情けないなあ〜ほら、バス来てるよ!!」

「奈菜…はあ〜い…」

バスに乗った。うん。乗ったのはいいことだ。

乗らなくては、学校に行くことができない。

だが…

「奈菜…《えええー?!》」

一也君が、未魅の彼氏と座っているではないか。

嫌な予感…

「未魅…いやあ〜ん!!ダアリン!!」

「未魅の彼氏>翔平<…みみい〜!!」

「未魅…ねえ、ダアリン?」

「翔平…なんだい、ハニー?」

抱きつきながら、何度も唇を交し合うバカップル…

ダメ…奈菜には刺激が強すぎる…

フラついた奈菜のもとへ、一也がきた。

「一也…人前であいつ等すごいよなっ」

そんなことを、言いつつ…

奈菜の隣に座った。

えっ?何??隣に…

座ったああ――？！

「奈菜… g j h m v d t y f w k @ ? !」

「一也…？顔、赤いぞ？？熱でもあるんじゃないか？？」
違いますってばー！！

でも…でも…

奈菜のおでこと大きな男の子らしい手が重なった。

ドクンドクン…

どうしよう…きよ、距離が5センチも離れてない…
ち、近すぎる…この、心臓の音が聞こえてしまうのでは…

「奈菜…《ど、どどどど…どうしよう…お、音があっつ》」
手がパツと離れた。

「一也…熱…あるかも…」

「奈菜…《え？！このまま私、帰っちゃったら…隣にいられなくなっちゃう…」

学校でも…》」

「一也…帰るか？？」

「奈菜…え、あの…大丈夫だよ…！！ありがとう。」

「一也…無理すんなよ？？」

なんだか、胸の奥が暖かくなったのを感じた。

「奈菜…一也君って優しいね…」

「一也…んなこと、ないよ」

ちよつと照れながら、鼻の頭をかいた。

いつだって、一也君はクラスの人気者だった。

一也君が、笑っているところをみていたら

私もがんばれるような気がして…

ずっと憧れてたんだっけ…

そんな彼が今私の隣にいるんだと思うと…

なんだか、生きててよかったあ…なんて思ったりしちゃう。

「一也…俺、知ってるよ。」

「奈菜…え？何を？？」

「一也…お前が優しいってこと！！！」

「奈菜…：へっ？？」

「一也…今、校庭の周りがひまわりで満開じゃん？？」

「奈菜…うん。：ひまわり…好きなの。」

「一也…毎日、水やりしてるよな、昼休み。」

ぶわっ

奈菜の顔がお日様のように真っ赤に染まった。

「奈菜…みっみてたの？？！」

「一也…ああ。昼休み、サッカーしてたらお前が水やりしてるのが目に入って…」

「奈菜…そっそうだったんだ…こ、声くらいかけてくれれば…いいのに…」

「一也…なに一丁前に言ってるんだよ。お前男苦手だし、話しかけたら恐るかな、って思って…」

「奈菜…気づかってくれてたんだあ…ありがとう！！！」

って、え？今の会話おかしいよ…

なんでそんなこと、あの一也君が知ってるの？！

でも、水やりしててよかったかも…なあって…

「一也…ひまわり…なんで好きなんだ？？」

「奈菜…だって、強いから。」

「一也…強い？？」

「奈菜…うん。夏って短いじゃない？？」

でも、ひまわりはそんな短い期間で立派に大きな花を咲かすの。

強いよ…私、弱いからひまわりに憧れているだけなのかもしれないけど…」

「一也…ひまわりがお前に似たのかもよ？？」

「奈菜…ひまわりが…？？それはないよ…！！私、弱いもの…」

「一也…：弱くないだろ。1年の時お前一人だったじゃん」

「奈菜…うん…」

「一也…今はあそこでイチャイチャしてるけど、神崎という友達がいるし」

俺だっているし!!」

満面な笑みだ。

「奈菜…《きゅうくん》一也君…」

奈菜も目に涙をためながら、笑った。
それと同時にバスが学校に到着した。

一也が先に出た。そして…

「一也…昨日も言っただけだよ…」

「奈菜…何を?」

「一也…お前、笑ってた方がいいよ!

ひまわりみたいに可愛いから!!」

そう言い残し、ダッシュでその場から立ち去った。

奈菜は、夢を見ているのだろうか…?」

「奈菜…夢…なのかなあ…?」

ぽつりとつぶやく奈菜に問いかけてきた、バカップル。

「未魅…なに、なに?」

「翔平…もしかして…!」?

「奈菜…えっ!!…な…ななな…・…なに?」

「未魅…顔にでてるわよ!!」

「翔平…一也なら、他人の心がわかるやつだから…・

安心しろよ♪」

「奈菜…ありがとう…実は今ね…笑った方がひまわりみたいに可愛
いって…」

「未魅&翔平…ええええええええ一ツ?!」

「翔平…脈アリじゃん!!…奈菜は、どうなんだよ?」

「奈菜…うん…。未魅ちゃんにさっき隠してたのは、このことな

の。」

「未魅..そっかぁ!!..やっとな恋する乙女ね!!..」

「奈菜..でもでも!!..告白はできない!!..あんなこと言われちゃったら..」

目も合わせづらいよぉ」

「未魅..あ..。」

「奈菜..え..??..」

どうやら、奈菜はこれから先のことについて何も考えてなかった様子..

そう、ここからが一番悩むところなのだ。

「未魅..あいつ、今から教室でずっと隣なのに..」

何考えてるのかしら..」

「奈菜..・・・..あ。」

今日は、まだ始まったばかり。

奈菜はこの先どうなるのだろうか..

この胸の高鳴りは…（後書き）

投稿が大変遅くなってしまいました。

誠に申し訳ございません…

第一話を読んでいない方、私の投稿が遅すぎて内容をお忘れになってしまった方は、第一話を読んでいただけると幸いです。

楽しい一日（前書き）

今日は、お話しできるだろうか…
目も合わせられないかもしれない。
けど、頑張るしかないから。

楽しい一日

「奈菜.. はあ...」

「未魅.. それでさ!! ダーリンったら、トイレで流しそうめんやるとか

言ってるの!!」

「奈菜.. はあ...」

「未魅.. 流す場所がないのはわかるけどさあ」

トイレで流したらもうさよならよ!! って怒ったんだけどね」

本当に流そうとした姿が可愛くって」

「奈菜.. はあ...」

「未魅.. って、ちょっと!! 奈菜、今の話聞いてなかったでしょ?!」

「奈菜.. 聞いてたよ.. そうめんおぼけがでて、未魅ちゃんが悲鳴をあげたら、翔平君がトイレに流しちゃったんでしょ?

もったいない、私が食べたかったのに.. って未魅ちゃんが言ってる..」

「未魅.. :は? ! ちよっつあんた大丈夫? !

全然違うわよ!!」

朝っぱらから騒がしい二人の前に、ある少女が近づいた。

「奈菜.. :あれ? そうじゃなかったっけ?」

「未魅.. はあ.. 大丈夫よ。一也君、何か間違えたのよ。

奈菜の男子嫌いを直そうとしてくれたのかもしれないし

..」

「奈菜.. あのね、私.. 一也君の事..!!」

「ある少女.. あの..」

「奈菜.. は、はいっ? !」

ビクビクしている奈菜をみ、未魅が力強く言った。

「未魅…なあにかしら？？おたく、うちの娘に何か用でも？」

「ある少女…突然すみません。C組の、岩井れい奈です。」

B組の、湊奈菜さんですよ？

「奈菜…そうですが…私、C組に関わるようなことは

いっさいしていませんけど…」

「未魅…そうよ。何？Cの人は、Bを上に見ているそうじゃない？
い？」

カップルまだ、2組しかないそうね。」

「れい奈…少し、だまっていただけです？」

「未魅…あっそう。負け惜しみみたいなの？ね？」

まあ、しょうがないわね！負け犬は吠えたがるって

言うしね！！」

「れい奈…すみません。」

少し、機嫌が悪そうな口調で言った。

未魅は、あまり気に入らなかった様子だったが、

こんな仔からはやく離れたいと思ったので、話す気がうせ、
話すのをいったんやめた。

「未魅…ふーん…まあ良いわ。んで、用件は？」

「れい奈…一也君とバス隣だったけど、付き合ってるの？」

私、後ろの席にいたんだ。

仲良さそうにしてたし、席もあの仔の隣っていうじゃ

ない？」

「奈菜…岩井さんは…一也君が好きなんですね…」

「れい奈…っっ？！ち・違うわよ！！」

カーッとつとれい奈の顔が真っ赤に染まった。

まるで、沈んでいく夕日のようなだ。

「未魅…なにあんた。バレバレよ。」

「れい奈…違う!!」

「奈菜…大丈夫。私、付き合っていないから。」

にこっと笑う奈菜を見て、れい奈はほっとした様子になった。

「れい奈…そう、ありがとう。じゃあ。」

れい奈はダッシュでその場をはなれた。

「未魅…もう、奈菜。ああいうときは嘘ついて、

つきあってまあ〜す!

って言うところよ!!」

「奈菜…悪いよ、そんなの!それに…」

「未魅…それに?」

「奈菜…よっぽど、一也君が好きなのよ。」

少し悲しげにうつむいた奈菜の横顔に、未魅はそっとのぞきこんだ。

「未魅…奈菜…?」

「奈菜…私、気づいてた!」

「未魅…へ?」

「奈菜…一也君の制服に、盗聴機がついてたの。」

「未魅…うそ…」

「奈菜…それにね、私と一也君が座った席の後ろは、誰も座れるような
イスじゃなかったのよ。」

「未魅…何それ、ストーカー?!」

「奈菜…ストーカーまではいらないんじゃないかしら…」

未魅は、奈菜に腹が立った様子だった。

パンッ!

威勢のいいビンタの音が、誰もいない廊下に響き渡った。

奈菜は、廊下にヘナヘナと座り込んだ。

「未魅..馬鹿!!いい加減目覚めなさい!!」

あのねえ、盗聴機は、裏ネットでしか買えないものなのよ?!

どうする?!自分のプライベート、誰かに知られたら?!

あっちがいくら好きでも、一也君が困ることなのよ?!

あんた、一也君のこと考えてないでしょ!?

奈菜らしくないわよ!」

「奈菜..だって...岩井さんの気持ちわかったの...」

「未魅..ストーカーする気持ちがわかるだなんて..」

奈菜、最低ね。」

あきれた顔をし、未魅はその場から離れようとした。

「奈菜..違う!!お願い、未魅ちゃん聞いて!!」

「未魅..はあ..今度はなに?」

「奈菜..私..一也君好きなの..」

ううん、大好きなの!!」

「未魅..はあ..奈菜の馬鹿。

好きならなおさらじゃない。

あたしの言ったこと、もう伝わった?」

「奈菜..うん..未魅ちゃん。私、どうかしてた。

大切な友達を..失うところだったあ..!!」

ヴあ..ん」

目にたまっていた涙が、いつきにあふれ出した。

ちよっと、未魅の目にも涙がたまっていた。

「未魅..もう..ほら、泣き過ぎよ。」

ハンカチをわたし、手をさしのべ、奈菜を立たせた。

「未魅..よいしょ!!ほら、ちゃんとふいて。」

未魅はお母さんのように手慣れた手つきで、奈菜の涙をふきとった。

「奈菜..ありがとう..」

「未魅..はいはい。まったく世話がやける娘なこと。」

ガシッ！つと奈菜は抱きついた。

「奈菜…ママァー！！」

「未魅…あはは。ねえ、奈菜？」

「奈菜…なあに？」

「未魅…あたし精一杯応援するよ？奈菜の恋！」

「奈菜…うん。力強いよ…ありがとう」

「未魅…一也君と出会ってから、奈菜は変わったもの。」

「奈菜…え…・・・本当？私、ちゃんと変わってる？？」

「未魅…うん。あたし、正直言ってさっきびっくりしたの。

いきなり抱きついてくることなんていままで

なかったからさ…」

「奈菜…一也君のおかげでもあるよ…けど…

一也君と同じくらい大好きな友達のおかげでもある…！」

「未魅…はは。何よ、改まって言ったら恥ずかしいわ。」

奈菜は初めて、未魅の照れ顔をみた。

「奈菜…未魅ちゃん照れてるー！！」

「未魅…気にするんじゃないわ！！」

はやく、奈菜の王子様のもとへ行くわよー！！」

「奈菜…はあーい！！」

二人は走って教室へ行った。

気まづかった教室だけど、奈菜は胸をはって、席に着いた。一也がこちらを気にしていた。

「奈菜…おはよう！さっきは言えなかったから」

「一也…お、おう。おはよ」

一也はびっくりしていた。

それもそのはず。奈菜はこの短時間で輝いたのだから。

奈菜は窓側の一番後ろの席。

数学の授業中、空を見つめていた。

奈菜は、空が大好きだった。

見ていると、心が落ちつくのだ。

でもそれは、一人だったときの話し。

今はすっかり見ていなかったことを思い出し、せっかく窓側なんだから

見てようと思ったのだ。だが。

「数学の先生＞大竹先生く…じゃ、この問題を…

湊奈菜さん。」

奈菜は、数学大嫌い。

「奈菜…は、はあい…」

どうしよう…よし、ここはまず、Xを代入して…ううんと…
右となりから、答えの書いてあるノートが出てきた。

一也君の字だ。

一番後ろの席なので、大竹先生にバレていない。

「奈菜…XⅡ12です。」

「大竹先生…ですよね♪」

「奈菜…ふう…ありがとう、一也君!!」

「一也…大丈夫。その代わり、英語教えてくれよ。」
にこっと笑った。

「大竹先生…おい、菅野!!寝てんじゃねえ!!」

よかった。大竹先生は、女子に優しく、男子に厳しいのだ。

一日は早いもので、もう終わろうとしていた。

「奈菜…今日は、楽しかったなあ。」

「未魅…珍しいね、楽しかっただなんて。」

「奈菜…とくに数学とかさ。」

「未魅…そうそう、いきなり頭良くなったかと思ったよ!」

「奈菜…あはは。私…頑張るね。」

「未魅…うん。ダーリンと応援してるわ!」

いつも、奈菜と未魅が逆に曲がる道まで着いた。

「未魅..じゃ、明日もここで。」

「奈菜..うん。また明日ね!」

こんなに楽しいんだな、恋って…

「奈菜..うわあゝ星綺麗!!」

奈菜は、趣味の短歌を思いついた。

「奈菜..大空に 光輝く 星たちが

夏の夜空の 灯ともしびとなる。

私も、命の灯輝いてるよね…」

明日は、どんなことが私を待っているのだろうか…

楽しい一日（後書き）

3話書いてみました。
ぜひコメント待ってます！

目の前に・・・(前書き)

恋って、こんなに心がクシャクシャになるんだね・・・
恋って、こんなに胸が痛いんだね・・・

夢なのか、現実なのかもわからなくなるときがあるけれど・・・
それが私の・・・記念すべき初恋。

目の前に・・・

P i P i P i P i :

奈菜の目覚まし時計が、いつもより鳴っている時間が長い。

「奈菜…ううん。」

まったく起きる気配がない。

両親も今日は朝からいないようだ。

ピンポンピンポン：

「奈菜…んん…今度はピンポンダッシュ…??」

たくさんの音が交じり合い、奈菜の耳へそそがれる…

「奈菜…ああ、もううるさいなあ…」

ドアをドンドンたたく音も聞こえる…

「?…なな〜!!」

「奈菜…誰だろう…?」

奈菜は、急いで一階に下り、ドアを開けた。

すると、未魅が息切れをし、立っていた。

「奈菜…あれ、未魅ちゃん!おはよう!」

未魅は、この世の者とは思えないほどの殺気で

奈菜をギロリとにらみつけた。

「未魅…はあはあ…おはよう!じゃないわよ。」

あんた今何時だと思ってるのよ!

何度も電話とメールしたのよ?!」

奈菜は、リビングの大きな時計を見た。

二度、三度と目をこすりながら一生懸命見ている。

「奈菜…八時…十分…」

八時十分?!」

奈菜の学校は、八時三十分までで登校の学校で、奈菜はいつも七時四十分に

家を出るのだが、大遅刻なのでもう二人ともあきらめた様子だ。未魅は、今頃気づいたのか：とあきれた顔をしながら言った。

「未魅…一也君の隣、女の仔座ってたなあ：

ロングでサラッサラだった。

おまけにかなり美人。先輩かも。

けっこう仲良さそうだったなあ・・・」

「奈菜…ええっなんで！未魅ちゃん、どうしよう・・・」

「未魅…一応ダーリンを監視につけてるから安心して！

何かあったらメールがくるはずよ。」

R i R i R i ♪

未魅と翔平が大好きな着うたが流れた。

未魅のピンクだらけの派手な携帯に、一通のメールが届いた。

「未魅…あっ！！さっそくきたきたあ！

んっとなになにに？」

携帯には、こう書いてあった。

【未魅りん、大変！美人の仔やるやる！

きつと、一也にこの様子だし・・・

恋しちゃったんじゃない？！】

・・・。未魅と奈菜の間には沈黙が流れた。

「未魅・・・。奈菜、強敵出現ね♪」

「奈菜…えええっ？！」

やだやだ、とジタバタする奈菜を可愛そうに思った未魅は翔平にメールの返信を送った。

手慣れた手つきでボタンをどんどん打つ未魅。

「奈菜…（さ、さすが未魅ちゃん・・・完敗だわ・・・）」

パソコンと携帯を折り、バッグにしまった未魅は口を大きく開いた。

「未魅…あのさ、未魅待ちくたびれてんのね？」

いつになったらお着替えタイム始まんのかしら？」

「奈菜…は、はいっ！ただいま！！」

あきれた様子の未魅は、勝手にリビングへあがった。

「未魅…ゲッ！あんたんちのリビング広っ！おまけにめっちゃ

綺麗やんか！

そうえば、奈菜の家に初めて未魅あがったんやっけ……」

奈菜はうれしそうに走ってきた。

「奈菜…お母さんね、めったに掃除とかしないねんけど、

私掃除大好きなんだあゝ！」

「未魅…ふうん。未魅んちも似たようなもんだよ。

ママ、男遊び激しいからパパでてってね……

掃除なんか大晦日の日に自分の部屋ちょこっと掃除して終

わり

やねんで。」

「奈菜……未魅ちゃんは、お母さん嫌いなのか？」

「未魅…未魅なあ、おばあちゃんっ仔だから……

ママと話すのなんかめったにないで。」

「奈菜…生活苦しくない？家計はどうなってるの？」

「未魅…おばあちゃんが、がんばってん。

時々高校生の姉ちゃんも大阪から帰ってきたりして。

パパも月5・6万も振り込んでくれてんねん。」

「奈菜…大変……なんだね……」

前にも未魅の家庭について少し話してもらったことがあった奈菜

だが、

ここまで大変なのかはしらなかった。

「未魅……未魅な、ママと本当はろくにしゃべったことないねん。

お姉ちゃんはママが大嫌いで、自分から一人暮らしえらんでな……

仲良しの友達は、みいゝんなここの学校の学校で一緒なのによ？」

「奈菜…午後から…学校行こう?？」

奈菜は、こんな元氣のない未魅を初めてみた。

自分じゃ、どうしようもならないと思い、翔平に会ってもらおうと思ったのだ。

それに…一也のことも気になっていた…

「翔平…未魅!! 遅いよ!!」

待ちくたびれたぜ、俺」

P M 1 時 3 0 分。奈菜、未魅は学校へついた。

「奈菜…ごめんね、翔平くん」

私のせいなんだ…」

「翔平…あはは、そうなん? 大丈夫。気にせんといて」

それより、湊っちどうすんだあ?

美人の愛川瑠璃亜、あいかわるりあ一也に

ずっとくっついてるけど…」

「未魅……つぶすしかないわね…」

「奈菜…そ、そんなに美人なの? 周りそんなにさわいでないけど…」

「翔平…よお、みてみ?! 男子ども魂ぬけてるぜ?!」

周りの男子は、生きているのか…?

「奈菜……どうしよう…」

「未魅…ふん! 未魅にまかせんしゃい!!」

「翔平…未魅。どうするん?」

未魅は瑠璃亜のもとへ行った。

「瑠璃亜…あら、はじめまして♪」

お肌つるつる・ぷるぷる、そして…ボイン…

「未魅…か、一也くんおそって何たくらんでるん？」

「瑠璃亜…．．．おそう？このわたくしがですの？」

「未魅…そうよ！彼女でもないのにひつつきすぎじゃない！？」
しまった．．．未魅がキレた。

周りの皆は未魅の恐ろしさをしらないやつはいない。

「瑠璃亜…．．．あなた、もしかして．．．

彼に惚れているのではなくて？」

「未魅…はあ？あたしにはあんたと違って、かっこいいダーリンがいんのよ！」

それに．．．一也君迷惑がってんの。

やめたら？

なんか、意地悪いメスブタみたいね。

綺麗にみせてるのは外見だけ？」

周りは、静まっについて．．．未魅の怒鳴り声だけが教室中に響いた．．．

「瑠璃亜…．．．あなた、何様ですの？！」

さてはあなた、わたくしが美しすぎるからって．．．！」

「未魅…おだまりなさい、メスブタ！！」

本当に美しい人は自分で言わないわよ。」

未魅は、ふん！と席へ座った。

一也が、教室にもどってきた。

「一也…あれ．．．？湊．．．

きたんだな」

「奈菜…あ．．．うん．．．」

周りの静かさに戸惑いを感じた一也は、奈菜に問いかける。

「一也…．．．湊．．．何があったんだ？」

「奈菜…え．．．あ、その．．．えっと．．．」

「瑠璃亜…一也様．．．？」

「一也…．．．愛川、どうした？」

なんでないてんだ？」

「瑠璃亜…わたくし・・・一也様が、す・・・」

「奈菜…一也君!!」

一也は驚いた様子で奈菜を見て、返事を返した。

「一也…どした・・・?」

未魅は奈菜と目でアイコンタクトをかわすと、お互いほほえんだ。

「未魅…(奈菜、奈菜なら平気!!)」

奈菜は一也の腕をグイッとひっぱり、教室から出て行った。

「瑠璃亜…ちっ

なんなんですよ、あなたたちは。」

「未魅…ふ・・・

恋のキューピット様よん♪」

「一也…はあ、はあ・・・湊!?

おい、湊!？」

ぱっと手をはなした。

「奈菜…私・・・ここに咲いてる・・・

はあ、はあ・・・

ひまわりがね・・・はあ・・・

大好きなの・・・はあ・・・

だい・・・大好きなの・・・」

「一也・・・うん。」

「奈菜…でもね・・・ひまわりより好きなものできたの・・・」

奈菜は、口にたまっていたつばをゴクリと飲み込むと、大きく息を吸い込んだ。

「一也…俺も・・・サッカーより大切なもの、見つけた・・・」

奈菜は、一也の顔を見上げた。

「奈菜・・・へ?」

サッカーでいつも頭がいつぱいだった一也。

キャプテンで大変そうだったけど、笑顔で皆をまとめていた一也。サッカーをしているときの姿が一番カッコいい一也。

私の大好きな・・・一也。

「奈菜・・・それって・・・何？」

ふるえた声で、奈菜は問いかけた。

「一也・・・好きなんだよ・・・」

「奈菜・・・」

「一也・・・湊奈菜が・・・愛しいんだよ・・・」

一瞬、のどの奥がふさがってしまったかのように声が出なくなった・・・

一也君・・・私が好き・・・??

反対じゃなくて・・・一也君が・・・??

涙が頬をつたった・・・

「奈菜・・・私は・・・いい夢を見ているの？」

「一也・・・違うよ。夢なんかじゃ・・・ないよ」

「奈菜・・・夢だったら・・・さめてほしくないなあ・・・」

一也は、奈菜の涙を指でふきとり、そおっと、唇にふれた・・・

前は、私の隣にいたのに・・・

今は目の前にいるよ・・・

目の前に・・・（後書き）

おかげさまで四話目です。

よかったら、評価や感想をお願いします！

最終話

今日の天気は、○。

奈菜の気分は・・・◎。

あの後授業をサボって、ずっと話しつづけた。
きつと絶対、一生忘れられないんだろうなあ・・・

「奈菜.. よしっ！今日はちゃんと起きたぞおっ」
はりきって制服を着て、奈菜はリビングへ行った。
生まれて初めて恋をして、生まれて初めてキスをして・・・

長いようで短い平凡な毎日に今、
私は生きている・・・

「未魅.. おはよう、奈菜！」

いつものバス停で見るいつもの笑顔。

未魅ちゃんには悪いけど

今日も早く一也君と会いたいなあ。

「奈菜.. 一也君と会うの楽しみ！」

嬉しそうにはしゃぐ奈菜を未魅は真顔でみつめた。

「未魅.. なんだか・・・恋のキューピットもういらないうね・・・」

寂しいわ・・・」

しゅんとする未魅に奈菜は驚きを隠せないようだ。

「未魅..ねえ、奈菜？よく・・・聞いてね？」

「奈菜..ふふっどうしたの？らしくないよっ」

歯をくいしばって、未魅は口を開いた。

「未魅..未魅なあ、大阪に転校するん。」

——え——

突然の知らせ。

なに・・・それ・・・

そんなの聞いてない・・・

「奈菜..あ、あははっ冗談きつつうい〜！

やだ、ビックリしたあ!!」

「未魅..ほんまやねん・・・」

「奈菜..・・・何言ってるの・・・？」

ずっと一緒だったよね？

もう少しで三年生なんだよ!？」

「未魅..そう・・・だね・・・」

奈菜の瞳には、大粒の涙。

「奈菜..最後の修学旅行・・・

一緒に行くって・・・

あの日約束したよね・・・？

友達がいなかった私に・・・」

未魅が口をゆっくりと開ける。

「未魅…未魅も昨日いきなり連絡がきてな…
姉ちゃん、小さな会社やけど、
もう就職きまってん…。」

じゃあ、未魅ちゃんとは…
しばらく会えないの？

「奈菜…。。じゃあ…。
翔平君はっ?!」

「未魅…うん…。幸せに暮らせて。
認めてくれた。遠距離恋愛だけどさ…。」

あんなラブラブだった二人が…。遠距離？

いや…。そんなの…。

「未魅…嫌とは言わせないわ。

未魅も姉ちゃんも…。
嬉しくて仕方ないんだから…。
奈菜も友達ならさ、認めてよ!
あんたはもう…。ひとりじゃないのよ?」

熱い言葉に、未魅の涙が重なり落ちてゆく…。

「奈菜…。。うん…。
そうだよね」

一人じゃないことなんて、もう気づいてた
私、変わったんだもん…。

「未魅..ほら・・・バス乗り換えだよ」

かばんを持つと、未魅は先にバスをおりていった

「奈菜・・・なんで・・・」

どうしよう・・・

一也君と付き合うことができたのに・・・
全然嬉しくないよ・・・

バスでは沈黙が流れた。

時間が合わなかったのか、いつもの二人がいない

「未魅..あんれえ？ダーリン寝坊かな。」

「奈菜..いつ・・・」

ボソツとつぶやく。

「未魅..え？」

「奈菜..いつなの・・・？」

転校の日・・・」

「未魅..今年中にはもう・・・」

今の季節は、冬二月。

あの頃はひまわり満開で、暑かったのに・・・
時がたつのはとても早くて・・・

「奈菜..早いん・・・だね」

「未魅..うん・・・元気でね？」

「奈菜..やだ！まだでしょ？早まんないで！！

いつきに悲しくなるよ・・・」

未魅は優しく微笑む。

「未魅..うん・・・だね！ごめんごめん」

春から未魅ちゃんいないんだあ・・・

悲しくて死んじゃうかも・・・

「未魅..はなれたってさあ」

「奈菜..・・・？」

「未魅..はなれたって、友達じゃなくなるわけじゃないでしょ？

一度友達になったら一生友達なんだよ！！」

奈菜の目から一粒の涙

「奈菜..当たり前だよお・・・」

一也が奈菜のもとへ来た。

「一也..あのさ、湊・・・神崎いなくなっても・・・
俺いるから・・・」

ちょっと、ビックリ。

「奈菜.. はは、ありがとう」

「一也.. 今日... 十三日じゃん？」

十三日... あれ、明日は...

「一也.. 俺、甘いもの好きなんだけど...」

照れくさそうに言う一也が可愛くて...

「奈菜.. うん、まかせて♪」

ニカッと笑う奈菜。

一也はテレながら笑い、席へもどっていった。

—放課後—

「未魅.. 奈菜、かえろ！」

チャイムとともに走ってきたのは、
頭がクシャクシャな未魅。

「奈菜.. あはは！うん、でも... 急いでるの？」

「未魅.. あん、なさけない！明日のために

買い物行くわよ！

あんたんちの台所広いし... 決まりね！」

「奈菜.. ああ、そうゆうことかあ」

一也と翔平はジャージに着替えている。

「一也..湊、帰るのか？」

「奈菜..うん！部活頑張っ
てね♪」

最終話（後書き）

打ち切りとさせていただきます

読んでくれた方ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1138b/>

あの仔の隣

2010年12月5日10時32分発行